

Book Review

世界基準の臨床歯内療法 2 外科的歯内療法 マイクロスコープを用いたモダンテクニックの実際

石井 宏 著



Reviewer

大野純一 Junichi Ono
(群馬県・大野歯科医院)

A4判, 128頁
オールカラー
定価(本体 12,000円+税)
医歯薬出版刊



本書は日本を代表する歯内療法専門医の石井 宏先生(東京都/石井歯科医院)の3冊目の著作である。

さて歯科治療は「不確実性」の比率が高い分野である。したがってわれわれの仕事では常に100%はないことを前提に物事を進めていくが、歯内療法はそのなかでも特に不確実性が占める割合が高いと思う。

そういった不確実性に対し歯科医師は伝統的に、経験と手先の器用さで対処してきた。近年、歯内療法においては歯科用顕微鏡の発展と普及、それに伴う器材や材料、特にMTAセメントなどの登場により、その不確実性は以前ほどでないはずである。安全・確実に歯内療法を行うためにそれらを使いこなすことは非常に大切なのだが、その反面この歯科用顕微鏡に対する過度の期待とそこから造りだされた“エンドブーム”ともいえる現象のためか、

歯内療法学で先人たちが築き上げてきた原理や原則から逸脱している例を目にする機会が多く、あたかもマイクロスコープなどの最新の器材さえあれば治療は成功するかとよく語られることがある。

しかし歯内療法における原理原則とは、石井 宏先生の前著「世界基準の臨床歯内療法」でも特に強調されているが、ラバーダムの使用、術野の消毒、軟化象牙質の確実な除去、そして隔壁の作製や確実な仮封といった、とても地味な作業からなる、「無菌化のための全準備」からである。これらの原理原則をおろそかにした歯内療法は、単なる「器材と幸運に頼った」臨床ではない。

エンドの分野に限らず、海外で良質な専門医教育を受けた歯科医師には一つの特長がある。それは「基礎」を決しておろそかにせず、「原則」をしつ

かり守り、そして「リスク」に対応する術を知っているという点である。そのうえでところどころに「経験」という調味料をうまく生かしていく。ただ手先が器用なのではない。日本人は手先の器用さを過大に評価するが(これも大切なことではあるが…)、そこから生まれるのは単に個人技にすぎず、残念ながらそれでは歯科医療全体は決して発展しないのである。

本書は前作の特色である「原理」や「原則」を大切にす姿勢を忠実に受け継いでいる。派手な症例や美しい臨床写真ばかりで中身の無い本では決してなく、エンドサージェリーに関する大切な原理と原則を実に詳細に解説している。このことが本書を、エンドサージェリーを日常臨床で行う臨床医にとっては必読の書にしており、そして間違いなくこれからも長く読み継がれる教科書となるであろう。